

## さまざまな課題を共に負って

新年礼拝 説教

(2013年1月5日 聖アンデレ主教座聖堂にて)

主教アンデレ 大畑 喜道

新たな年を迎え、主の祝福が皆様の上にありますように祈ります。

皆様がたはどのような新年を迎えられたでしょうか。小職は久しぶりに家族が全員そろって、老人福祉施設に入所している義父や独り暮らしの母ともども、子らや孫、ひ孫も一緒にひと時を過ごしました。しかし当たり前前に繰り広げられている喜び交わりを味わいつつも、その半面で、なお自分たちだけがこの喜びに満足していて良いかと思ひ知らされてもいました。特禱にもありましたように、すべての人が完全な和解と交わりの中に生きることができるようにと、私たちは召し出されているのだ。完全な和解と交わりの中にすべての人が生きていない現実がいまだある。私たち東京教区に連なるものが、一致団結していくことの大切さを痛感しました。



### ①大震災の課題への取り組み

2011年3月に発生した東日本大震災は、現在も尚、わたしたちにとっての現実的な課題です。この震災と原発の事故は、東北地方に起った重大な自然災害であるだけではありません。単に東北の方々の問題であるわけではなく、日本全体の、特に日本における主イエス・キリストの働きに参与するわたしたちキリスト教会にとって背負うべき「わたしたちの課題」と理解してきました。「一緒に歩こう」という呼びかけはこの事態が私たち自身の担うべき課題・問題であることを端的に示しています。わたしたち東京教区は、他の日本聖公会諸教区と、とりわけ直接の被害をこうむった東北教区との協働において、自らの課題を背負う働きを展開してまいりました。そのために、働いてこられた多くの信徒・聖職の皆さんには、心からの敬意を捧げ、感謝を申し上げますとともに、問題である復興の道が今尚遠いことを改めて心に留め、わたしたちの協働の働きをさらに進めることの具体化に教区を挙げて進んでまいりたいと思います。

それは日本の再生の課題として理解されるべきことと考え、キリスト教会として、置かれた社会に対する奉仕の業の実践であると言うべきでしょう。約2年が経過して、終わりのない旅のようにも感じられます。一緒に歩くことの難しさを実感もしています。自分の生活の質を変化させずに、当たり前の喜びを共有できない状況を看過したくなる誘惑を覚えるのも罪深さゆえでしょうか。しかしばらばらになったままでこの世界が一部の人のための享楽のために、弱者が踏みつけにされて犠牲にされてよいはずがありません。神は小さくされた人々が当たり前の喜びの交わりの中に生きることができるとを何よりも望んでおられます。その解決のために日本聖公会全体でまだまだ協力していく体制を続けていくことになるでしょう。

今年も教区として物心両面で積極的に協力できることをしてまいりましょう。

## ②教区教会牧会状況への新たな対処と信徒・聖職の協働の必要性

さらに東京教区主教として、新たな年を迎えるに当たって、これまでの在任2年間を思い、来るべき新たな一年を考えると、多様な課題に直面していることは当然のことですが、その課題の重さに身の引き締まる思いがいたします。来る3月の定期教区会においてさらに具体策を皆さんとともに研究し、喫緊の問題に向き合うために多様な方策を考慮し決定してまいりたいと思います。そのためには一人一人の意識変革は不可欠です。

まず挙げるべき課題は、聖職者数と教会数との間にある問題です。すでに一教会一牧師という従来の状況をそのまま継続していこうとすることは、現実的に不可能であることが明らかです。一人の司祭を養成するには、約10年という時間が必要と言われてまいりました。数年後には相当数の聖職方の定年退職を覚悟してはなりません。約10年という養成機関の年数を考慮しますと、どのように考えましても聖職数の不足することは目に見えております。その来るべき状況に対処するために、すでに始めておりますように牧師職の兼任、すなわち、少なくとも2教会を一人の牧師が兼任するということは、現状では通常のことと考えるべきことかもしれません。或いは、数教会が一体となって、一人或いは二人の司祭によって牧会していただくことも常態化することも考えられます。

自分たちの教会は大丈夫だということではなく、互いに近隣の教会と手を取り合うことの大切さ、そして何よりも誰かがやってくれるのを待つというよりも、自分も福音宣教のために召されているものだという自覚を強く持ちましょう。

下町教会グループの中で、数教会が協働で、また、支えあって、聖書研究会などの働きを実施しておられることに、小職は大きな意味を感じ、期待を持っております。このような働きが発展することによって、聖職間の協働の精神が励まされ、同時に信徒の皆さんも自己の教会を解放する、或いは他教会への参入を協働的に活発化していくことによって、見えない壁が取り払われるという現実を望みます。その意味で、現在ある教会グループの再編成や再理解、或いは教会グループの編成を単に地域的な割り付けのように考えるのではなく、協働による教会活動の活性化など、活動内容も、下町の例などから何か重要な示唆が生まれてくるのではないのでしょうか。そのような協働の働きの中から積極的な兼任牧師の存在も意味をなすのではないかと考えられるからです。

現在、60歳代を迎えられている、小職にとっての先輩聖職の皆さんについても同様に、小職の在任期間に定年退職されることになるのは規定の事実となっているわけですが、小職の希望し期待させていただく方々には、さらに現在もおられる囑託の聖職のように、囑託としてのお働きを望みたいものと考えます。特にこれら先輩聖職の方々が持っておられる専門的な知識・経験、とりわけ神学的な素養など、これら先輩聖職の皆さんの牧会経験を東京教区の財産として理解していきたいと考えております。召された職にある者に定年があるわけではありません。たとえ定年をむかえたとしてもその長い間培ってこられた知識や経験を生かし続け、福音宣教のためにますますご奉仕いただきたいと願っています。

## ③主教座聖堂を聖職の諸活動の出発点と理解する

さらに小職にとっての重要な課題は、同労者である聖職方とともに、さらに、聖公会の聖職者としての責任と任務を具体的に共有させていただきたいという思いです。

聖職者のあるべき姿、その日常の生活、牧会者としてのあり方については、聖職として召されたときに受けた按手式の式文の言葉が、明瞭に語ってくれています。毎年、私たちは、聖木曜日に主教座聖堂にお

いて按手式のときの約束の更新の機会を持っております。信徒の皆さんも、そのような約束の更新を行なう私たち聖職を見守っていただきたいと存じます。

日本聖公会は各個教会による牧師招聘制度をとっておりません。現状では、初代教会からの伝統とのかかわりの中で、私たち聖職は教区主教によって按手され、指名されそれぞれの任地に派遣されております。その出で立つところが主教座聖堂であると理解することが、聖公会の基本的なあり方であると理解してお



ります。このような聖公会の伝統的な慣行、そして祈祷書が表現するような主教を中心とする聖職団、取り分け司祭団の結束と協働的奉仕活動によって聖公会の属する各個教会の宣教活動により大きな力が加えられるのではないかと理解しております。

同時に、小職は、このような伝統の中にあっても、一方で、各個教会による牧師招聘制度にも考慮すべき重要

な点が多々あると考えております。但しいざ、具体的に実施するとなれば、そのためにはさらに、私たち自身の招聘に関わる神学的、教会行政的、などの理解が必要であろうと思われま。そのための制度的課題について、小職は現在、主教座聖堂活動委員会において、研究していただくよう、お願いしております。これは取り分け日本聖公会法規に関する問題となりますから、時間的にも、具体化においても容易な作業ではないと理解しております。しかし、一方では、この課題は十分に考慮に値する問題であることも確かです。招聘制度認容とその実施の過程における信徒の責任などは、各個教会の信徒が自らの教会の牧会者を選任するという意味での招聘の主体となるという点においても重要な問題提起となるでしょう。自分たちの教会のビジョンの策定を自分たちが行うというためには信徒も聖職もますます学びの時を多く持つ必要があります。日本聖公会、取り分け東京教区において、このような教会行政における問題提起には、日本聖公会の将来の活動に対しても、意味ある方向性が生まれる可能性を期待しています。

小職はこれらの多様な課題に直面して、私たち聖職者たちの協働的な働きの一環としての神学研究、牧会訓練などの、聖職者にとっての生涯学習の必要性が強く感じられていることを申し上げたいと思います。世俗社会における多様な状況の変化と発展の速度は、私たちにとっては脅威ともいえるような状況になっております。これらのキリスト教会を取り巻く状況にどのように対処していくかは、キリスト教会が歴史の中においても常に考え、行動の中核においてきた課題でした。小職はこのために、主教座聖堂の諸活動としての研究と訓練の実施、また、教区の聖職の皆さんにとっての、重要な研鑽の場となることを期待しております。

聖公会神学院もまた、そのためにあらゆる資源を提供してくださるよう願っております。特に小職が感じます東京教区の与えられた課題へ応答の場として、聖職の皆さんが、教区主教である小職と共に、聖公会の聖職として、また、各個教会における責任を担うという意味での牧師としての基礎的な働き、日常の礼拝と祈りのとき、聖書の研究、牧会上の課題に対する研修、信徒に対するケア、牧会訪問、病者訪問、信徒教育と牧会の協働者としての信徒の存在の顕在化（信徒奉事者などのような）、などのための研鑽を主教座聖堂における諸活動を基点として参加していただきたいと願っております。聖職者が、聖職者として

のあり方に熱心であること、そしてこれに応答した信徒の皆様の多様な活動があって、始めてキリスト教会の働きが行われ得ると理解しておりますことを知っていただければと願っております。

#### ④教会の使命の再確認

最後に、東京教区広報委員会から発行されているコミュニオン第7号に掲載されている主教座聖堂の働き（笹森田鶴司祭による）をご参照くださると主教座聖堂の主たる任務が述べられております。同時に、このような任務を果たしていくためには、私たちにとって重要な前提があると思います。同じ第7号に前田良彦司祭による本田哲郎神父の訳書の中からコリントの信徒への手紙Ⅰの愛の賛歌が紹介されている一文を注目していただきたいと思います。普通、「愛」と訳されている言葉をここでは「大切」としています。これは「愛」という言葉がなかったキリシタン時代に当時の宣教師たちが、「愛」という言葉について用いた言葉が「大切」、或いは「ご大切に」だったということを知ることがあります。私たちは主イエス・キリストに従って、まさに聖パウロが述べているような「大切」ということの実践こそが、私たちキリスト教会に属すると確信している者にとっての生涯の責任であり、任務であると思っております。聖書のみ言葉は私たちの実践によってのみ、すべての人びとにとって「生きた」み言葉となるのではないのでしょうか。その実践を、私たちはようやく理解し始め、神様の創造の業への参与と理解しようとしておりと確信しております。

1960年代が過ぎる頃から、世界の諸教会において強く述べられるようになってきたミッシオ・デイ、神の宣教への参加が私たちの課題であり、本田神父の訳されたという書物の趣旨もそこにあるのではないのでしょうか。他宗教やキリスト教の他の教派との関係、対立者への反感や排除の論理、も本多神父があえて「愛」という現代的な言葉を用いずに「ご大切」というキリシタン用語を訳文に採用されていることこそが目からウロコであると理解しています。

#### ⑤教区成立90周年から100周年にむけて

2013年をまた、新たな創造の年として迎え、主イエス・キリストに従う生き方、お互いをご大切にするという私たちクリスチャンに与えられた生きることを明確に示す実践を具体化していきたいと願います。

今年は教区成立90周年の節目の年でもあります。100年に向けてキックオフの年といたしましょう。漫然と過ごしてはすぐに時が過ぎていってしまいます。どんなに困難が待っていたとしても、キリストにつながっていれば大丈夫です。そして私たちは今日の旧約日課にもあったように、モーセの後継者として使命を与えられている。それぞれの与えられた場所、与えられた賜物を生かしあいつつ、神が私たちに与えられた使命を遂行して参りましょう。

制度の改革、学びの充実、これからの教区のさまざまな課題や問題を、信徒や教役者各位と十分に話し合い、理解しあっていきたいと願っています。今年も皆様の祈りと協力をお願いします。

主の定められた信仰の告白を共に唱え、一致のスタートといたしましょう。

(文責：広報委員会)